生理用品と女性の身体——パプアニューギニアにおける月経期間の過ごし方から

新本万里子

月経中の女性は、月経小屋や「女の家」の奥に座るものとされてきた社会がパプアニューギニアには多い。発表者が調査を行った村にもかつて月経小屋があり、月経と出産の場として使用されてきた。月経小屋の存在や男女の空間的な分離については、ケガレの観点からすでに多くの研究があるが、月経小屋に座る女性たちがどのような身体性を経験していたのかという観点から論じられたものは少ない。発表では、生理用品に注目し、生理用品の流入が、女性たちの身体観の再編に関わっていることを論じる。

事例として中心的に扱うのは、東セピック州マプリック地区ニャミクム村である。論を進めていく上で補助的に、同州アンゴラム地区マイオ村の事例を扱う。ニャミクム村は、セピック川北部支流域に位置し、州都ウェワクとは陸路でつながっている。隣接するマプリック町には外国資本のスーパーマーケットや薬局もたち、生理用品の購入が可能である。女性たちは市場で農作物を売って現金収入を得ており、その一部を生理用品の購入にあてている。一方、マイオ村はセピック川本流沿いの村で、町へ出るにはカヌーに乗り、陸路をトラックで移動しなければならない。ニャミクム村の女性に比べて現金収入が低いと推定され、生理用品の購入が比較的難しい状況にある。

ニャミクム村の月経小屋は、2006年には村中探しても2棟ばかりとなっていた。かつては夫婦毎に作っていたといわれ、90年代に大きく減少したという。現在、月経中の女性たちが座っていなければならないとされるのは、家屋の隅か床下である。しかし、実際に家屋の隅に座っている女性を見かけることはめったになく、月経中でも女性たちは普段と変わらない様子で過ごしている。

月経小屋があった当時、月経小屋のなかでどのように過ごしていたのかを聞き取ると、多くの場合、「座っていただけ」という返答が帰ってくる。座った姿勢で網袋を編んだり、料理をしたり、横になったりして時間をやり過ごしていたという。「座っていただけ」というのは、月経小屋の中にヤシ科植物の仏炎苞（ヤシ科植物の肉穂花序を包む大型の総苞。筒状の葉鞘がある羽状葉）を敷き、下半身には何も纏うことなく座っていたことを指している。経血の処理は、仏炎苞を傾け、月経小屋内の土に浸み込ませていた。月経が終わると、泉で体を洗い家屋へ戻ったという。月経小屋に座るという行為には、このような身体性を伴っていた。

ニャミクム村を含むマプリック一帯が実質的に西洋の影響を受けるようになるのは1930年代のことである。その後徐々に州都ウェワクや他の都市部との往来は拡大するが、女性が都市部へ出ていくようになるのは、筆者が聞き取りで把握している範囲で1970年代のことである。都市部で初潮を迎え、生理用品を使って学校へも通学したある女性は、1979年にニャミクム村へ帰村した。当時は、「女は月経小屋に座るものだ」という慣習が強く、月経小屋も作られていたという。彼女は帰村してまもなく結婚したが、当時は、夫の母親の手前もあり月経小屋を使用していた。しかし、すでに生理用品に慣れていたために仏炎苞に直接座ることができず、生理用品を使用したまま座っていた。現在40代後半になるこの世代の女性たちが、月経小屋へ行かなくなった最初の世代である。

年配の男性によれば、月経小屋があった当時、誰が月経中かということは男たちにも分かったという。月経に周期があるために、月経小屋に入る女性の順番さえも分かったとい

う。女性が月経小屋に行かなくなれば、妊娠したことを知ることもできたという。

この語りは、ニャミクム村ではすでに過去のこととして語られるが、生理用品の購入が難しいマイオ村では、まだ実感をもって発表者にも感じられることである。軒下に長時間座っている女性を目にすることが珍しくないのである。月経という女性の身体の出来事が、集落の誰もが知ることのできる出来事としてある。

植民地化以降、布が入り、経血を布に浸み込ませるということも行われた。しかし、生理用品の流入が、それを使い始めた女性たちを月経小屋の外に出し、「座る」という身体性から解放するという実質的な転換をもたらした。また、集落全体に知られていた性を、個人のものとした。発表では、現在、女性たちがどのように初潮という出来事を語るのかも含めて、生理用品と身体の相互関係について論じる。